



Instant Stories 2



閑古鳥あくた

「さて、少し突飛な話をしよう」

「教授う、またですかあ？」

「っふふ・・・助手くん、そう呆れたような顔をせんでくれたまえ。ゼミ生は私の空想を笑う

、
だが私は話さずにおれん」

わたしは盛大に溜息をついてから、腕だけ伸ばしてポットのスイッチを入れた。

「口説き文句なら、本当にお好きな方にどうぞ」

「可愛い顔して手厳しいな。では、楽にして聞いてくれたまえ」

教授はハンサムだ。教授だから当然頭も良い。

「・・・タイムマシンが実現したなら、助手くん、君は何をするかね？」

本人はタバコが好きだが、嫌煙家のわたしのために『煙を吸うハーブ』なんてもんを開発しちゃうほどには、ま、天才ってやつなんだろう。

「時間軸だ平行世界だ因果律だで、結局実現はできない、って話ですけど？」

「そこはそれ、空想で補ってくれたまえ」

「どっちが生徒だか分かりゃしませんね。では空想でお答えしましょう・・・」

タイムマシンか。

すべてが上手く調整された一あり得ないことだが一それが目の前にあると仮定するなら、わたしは・・・、

「高校時代の自分に、『この大学にだけは入るな』って言ってやります」

教授はコケた。上方漫才のように、あるいは出来の悪いコントのように。

「う・・・うむ、すばらしい回答だ！ はっはっは！」

「慌てて姿勢正しながら笑わんでくださいみっともない。

「だいたい、空想ばかりしてるせいで研究費もロクに貰えない自転車操業の研究者のゼミを受けて！」

息をつき、息を吸う。

「いいですか、その上ですよ！？ その上学生の身分で助手に仕立て上げられるなんてことが分かってたら」

「・・・分かっていたら、ここに来てなどくれなんだろうな、助手くんは」

ハーブを口から外して、教授はニッと笑う。

諦観の笑みにあらず、意地悪な笑みだ。くっそー、分かってて言ってやがる。

「・・・もっともっと勉強して、浪人でも何でもしてから、入ってたんだから」

ああそうさ。この三年間、絶対に認めてこなかったけど、言ってやるさ。

「わたしは、教授が認められる姿を・・・あんたの考えるとんでもね一代物が実用化されて普及した世の中ってやつを、見てみたいんですよ！」

まくし立てたせいで息が切れた。本当に言わなきゃなんないことは、言えていないのに。

「助手くん、少し落ち着いてからでかまわん。それとも……ああ、そうだな。こういうことは私から先に言うものだ」香り立つハーブの火を消して、

「私はな、助手くん。君が、この先も色々と私を助けてはくれぬものかと……近頃はそんな空想ばかりしている」

「それ……口説き文句ですかぁ……？」

「君の言うことに従っただけだが、不満だったかね？」

「ずるいや……」

「人の心はルービックキューブのようなものだ。多様な色が散らかり放題で、しかも思うようにはならない」

「どんな例えだ、このアホ教授」

そんなもの、一人分だけでもそろえられたら上等だろうが。

うっかりそろえられちゃった以上、

「責任とれよ」

「無論だ」

出来の悪いラブコメみたいに、真っ赤になるしかないじゃないか。

お湯を沸かし終えた電気ポットが、怒ったような音を立てた。

「月が綺麗ですね」

「貴女には及ばぬでしょう」

「不束者ですが」

「こちらこそ宜しくお願い致しまする」

ややあって。

「ええいっ、稽古になりゃしないじゃないのよ！」

ついに痺れを切らしたらしい。美しい黒髪を逆立てんばかりに憤慨して、少女は叫んだ。

「・・・む、これは失礼をば。して、どのへんが拙かったのでござろうか？」

「飽くまでお芝居だって言っているでしょうが！ あんたのはまるっきり・・・」

上気した頬に気づかないふりをして、彼女は更に声を張り上げた。

「プロポーズじゃないのよおお！」

「うむむ、此の方の習い覚えた“キネマ”なるものでは、こういう風に述べていたと覚えて申すが

。

『ロウマの休日』でござったか？ あれは良い物語でござった」

それは同意するけどと咳払いしてから、少女は説教を再開する。

「確かに！ 芝居の稽古に付き合ってくれと頼んだのはわたしですけども！

誰が本気で返答しろと申しましたんでしょうかね、ええ、お侍様！？」

はあ、めんぼくない・・・などと頭を掻き掻き、男は弁解する。

時代の要求に合わせてちょんまげと羽織袴とを止め、適当に一つに結わえた髪と半そでシャツ、すらっとしたデニムで決めた彼は――

「まったく、“時流し”だか何だか知らないけど。ラノベやSFじゃあるまいし、非常識ったらないわ」

――おっと、続ける言葉を取られてしまった。

要するに、彼は不可思議な刑罰によって永劫の時をさまよう者となった侍なのだった。

「うむ、確かに『ひぜうしき』も甚だしくござるな」

未だ憤懣冷めやらぬ様子の少女に紅茶とケーキを勧めながら、侍は思い出す。

妖怪変化に憑かれた君主を（正確にはその妖怪のみを）斬り、謀反の罪に問われた時のこと。真相を知る姫君のとりなしで切腹を免れ、妖術の実験台という形で、時をさすらう身になったこと。

別れ際の姫君の言葉。

一方の少女は、休憩もそこそこに台本をさらい始めている。

ただいま絶賛苦戦中の場面をすっとばし、ページをめくり、ニヤリと笑う。

「『わたくしは、待っております！』」

侍が答えないので少々調子に乗り、滑る様にアドリブを効かせる。

「『何百、何千年かかろうとも！ この身が朽ち果てようとも！ 姿を変え心を変え、待ち続けましょう！』」

侍は思う。

ああ、あの方も。

「・・・・・・・・必ずや戻りまする、姫様」

自分と、このような約束をしたのだ。

「ちょっと、それだけ！？ この私が情熱的に、詩情を込めて、謳い上げたのに！」

「お許しあれ。此の方は口下手にござれば。・・・数百年変わらず、かくの如くなれば」

「な・・・何さ何さ！ 急に真剣な顔しちゃって！ これはお芝居で・・・！」

「此の方の想い人は、肩に蝶の刺青を」

少女が息を呑む。

あるのだ。肩に、蝶のような形の、痣が。

「だからって！」

「左様、真相は闇。此の方にも、貴女にも、判らぬ俣にござる——それでよい」

さすらいの侍は、ただ微笑む。時間の果ての約束を確かめることを、彼は望まないというのだ。

「刀を捧ぐも命を賭すも、今となっては時代錯誤。それこそ『ひぜうしき』に相違ない」

「じゃ、じゃあ・・・どうしたいって言うのよ」

「藁を断つほどでもござらん。ご無礼ながら此の方、貴女を惚れさせとうなり申した。まずは・・・」

旧絵柄の千円札を取り出し、ニヤリと齒を見せる。

「そこの甘味処でも如何かな？」

どこかの異世界、魔法文明華やかな大陸。そこに光の都と呼ばれる国があった。緻密な魔術と高水準の科学によって、夜の闇を知らぬ街となった強国である。怪物や妖魔といった脅威も縁遠いだけに、防衛能力を保つための騎士養成機関が幾つも作られていた。

「どっちつかずのコウモリ野郎が！」

「吠えてなって。人のせいにしないで腕磨けばあ？　・・・おらあッ！」

軍事演習のコマである。

騎士の卵たちは二つの陣営に分かれて模擬戦を行い、兵法の基礎その他を学んでいく。だが、私は違う。

どちらの陣営にも属さない不確定要素として気ままに戦うことを許されている。模擬戦用の剣を打ち付け、イケメン君を昏倒させる。黄色い悲鳴、やめてくんねえかな。

「はい、一回休みィ。教官の特訓受けてらっしゃい」

コネも何もない中で唯一あった強い腕っ節と魔力で、実力を以って勝ち取った小さな地位と自由を満喫する。

「"白き輝き"ねえ」

大仰なチーム名だが、夜の闇の中を歩いた事のある奴がどれほどいることか。

「次はどいつだ！？　どどんかかって来い！　知ってる筈だ、私を倒せばどうなるか！」

男物の黒いコートを翻して宣言する。ちなみにズボンも男物、黒。

はいそこ、何かの病気を疑うような目で見ない。少し格好つけたっていいだろうが。

「学校指定のマジック・アイテム一つと期末試験の点数プラス50。ちょっと魅力的よね？」
純白のローブを纏った美少女が目の前に現れる。親しい間柄だ。

「やあ、そろそろかと思ってたんだ」

「どもども一。そんじゃ、始めましょうか」

周囲に被害が及ばぬよう、魔力による結界を張る。

コイツには模擬戦用の剣など役に立たない。自前のカタナを鞘走らせた。

「皆分かってないんだよね・・・貴方の性別」

「いいんだよ別に・・・おっと！」

「あらまあ、一撃で決めようと思ったのに」

「何度も引っかかるかっての。おらっ！」

不意打ちで払われた魔法剣を押し返す。手段を選ばない態度が私には好ましい。

「どうしてもこの試合で倒したいんだよね。強いコウモリさんを」

「そりゃどうも。ところで、何がそこまで欲しいんだ」

「あきれた！　自分に懸かった賞品も知らないで！」

打ち合う武器に込めた魔力が光を放つ。黒と白の輝きが舞い飛ぶ。

ちょっと見なさいと言うので掲示された賞品を見る。

「あっ！ "黒ノ剣"じゃねえか！ しかも本物・・・校長の出張先ってどこだったんだ！？」
詳しくは知らないが、魔力次第でどんなバケモノでも叩き斬れるらしい。黒い刃を持つ名うての魔法剣だ。

「知らないわよ。とにかく討ち取らせてもらいまっせー！」

「理由聞いてねえんだけど！」

「だから、欲しいだけよ。ほら、私って白ばかりでしょう」

先天異常で肌も髪も白く、目だけが赤く輝いている。

「なるほどね。動機が不純、お父さんは許しませんよ！」

「不純も何もあるか！ あと、実は可愛い女の子なお父さんを持った覚えはない！」
力を込めて打ち合う。

金属音の中で、言葉が聞こえた。

「"黒"を持ってみたいのよ。強くて強くて、いつも孤独なコウモリさんの為に、ね」
・・・やべえな。ちょっとだけ負けたくなくなってきちゃった。

「運命って信じるか」

その言葉に、目の前の美少女はポテトフライを詰めさせかけた胸を叩く。
コーラで流し込んで危機を回避し、盛大に笑う。

「そういう事はハンバーガー屋で言うんじゃなくて、夜景のきれいな港近くの高級レストランで言うもんだろうが！」

「さりげに要求織り込むな、友達なくすぞ」

「ははは。で、運命論だったな。信じると言えば信じるし、信じないとすれば信じない」

「へんな言い方だな」

「人外の、古き者の言い草はこういうもんだ。大概は人間を煙に巻く」

ふーんと生返事をして目の前の娘を見る。

作られたように整った金の長髪、白い頬、夕闇色の瞳。十二、三歳ほどの背丈にこれも白いドレス。

どう見ても人間じゃないんだが、周囲には見事に溶け込んで見せても居る。

古道具屋を営んでいた実家の蔵から見つけ出して数年だが、自我を最初から持ち喋り思考し、食い遊び眠る自動

人形だなどとは信じがたいままである。

「生命の神秘ってのか？　すげえよなお前って」

「違うな。人間の執念と、それこそ運命の悪戯と言うやつだよ」

照り焼きバーガーをかじり、コーラを美味そうに飲む。

「・・・興が乗った、昔語りでもしよう」

許可を取ってMP3レコーダのスイッチを入れる。家電量販店で買った安物だが、こんな所で役に立つとは。

「時勢を忘れるほどには昔のことだ。ある国に腕利きの人形作家が居た。

腕の代償のように幸の薄い男でな、やっと娘を授かったと思えば産後の病で最愛の嫁さんをなくししまった。

その娘も十二の頃に流行り病でなくなった」

場所の選択をミスった。ハンバーガー屋で聞く話じゃない。

気にするなと言ってポテトフライを咀嚼し、またコーラを飲んだ。

「続けよう。哀れ独り残された男は、腕と知識と魔術的な力をも駆使して生涯の傑作をつくりあげた。

並ぶ者なく可憐で優しく、誰からも愛され・・・それに応えることすらできる美しい者を。

そして、男も世を去った」

「それが、お前なのか」

「そういう事になる・・・何の因果か喋ったり考えたり動いたりできたもんだから所有者を渡り歩いてな。

古道具屋に流れ着いたと言うわけだ」

さて、これは信ずるに値する定めや否や。

そう妖しく笑い、娘は話を終えた。レコーダのスイッチをオフにする。

「お前も苦労したんだな」

「なかなか楽しいこともあったがな。

変わり者の貴族に引き取られたときなど、嫁に出されそうにもなったのだぞ？」

「なぬ!？」

「娘を溺愛するタヌキ親父だったのさ。結局は娘自身が嫁ぐことになったが。

・・・究極、この身に応えるべき愛情をかけてくれる所有者はいなかったな」

「今度、ゆっくり聞かせてもらう・・・食ったら買い物に行くぞ」

「今日は財布が緩いな、どういう企みだ？」

「信用しろ。あとたまには子供らしく欲しい物言ってみろ・・・お前は生きてるんだから」

異なことをと大笑いする。

「ふふふ、まあいい。そなたは我が生涯で最も変わった人間だよ」

「光栄だな」

「さて、では行くか。前から欲しかったゲーム機があるのだ」

「ああ」

「いつもの中古品ではだめだぞ、新品だからな」

子供っぽく、白い頬を膨らませて見せる。

おいおい・・・海に見える高級レストランはどこに行ったんだい、お嬢さん？

春である。

窓の外では桜吹雪が舞い踊り、樹の下で騒ぐ酔客の声が聞こえる。

「ハッ！」

「う！？ わ！」

そんな陽気の中、青畳の上に寝転ぶ。最高の休日だ。

「あだだだ！ ギブギブ、勘弁してくださいよ先輩～！」

．．．．．一瞬で引き倒された挙句に腕ひしぎ逆十字固めなんぞを食らっていなければ、の話
だけだ。

瞬時に技を外した先輩は、立ち上がって髪ひもを解く。

「ふう．．．。もう少し強くなっていると思ったけれど」

「えええええ！？ 開始10秒で足払いから十字固めのコンボ極めといてそれ！？」

「何をされたか分かるなら――三日あれば追い抜かされてしまうわね」

金木犀の香りのする黒髪を撫で付けながらのたまうけれど。

「どんだけ期待されてるんですか、あたしは！」

「期待されるのは嬉しいことではなくて？」

「それは．．．」

身体を動かすのが好きで、何を思ったか柔道なんぞを始めた。

12歳の頃、彗星の如く現れた美少女柔道家に目をつけられ、もとい出会ってしまった自分に、
心底から同情の言葉を贈ってやりたく思う。

天才であるところの美少女柔道家こと目の前の先輩に引っ張り上げられる形で、あたしもそれな
りに強くはなった。

なんだかんだで、期待される側に回ってしまったわけだ。

「嬉しいですけど、最近は何か窮屈な感じで」

「そう．．．もっと楽しんで試合をしたいのね？」

なら、期待など邪魔でしかないわ。

事もないという調子で、ラララと歌うかのように、先輩は言葉を続ける。

「期待を重く感じてても、止めさせることはできない。それは仕方ないわ。考え方の問題よ」

周囲は結果を見る、結果だけしか分からないから。だったら、過程を知る自分達は？

先輩は微笑んで、座って俯いていたあたしを優しく立たせてくれる。

「目の前の試合を楽しむ権利は、オリンピックの審査員だろうが誰だろうが、奪うことができ
ない。そう、例えば」

優しさをそのままに道着を掴まれ、背負い込まれる格好に。

「一本背負いのときの、背中に当たる感触とか」

何を言ってるんだこの人は、と思ううちに寝技をかけられ、

「極めるときの、二の腕のプニプニ感・・・とか」

や、やばい。この人ってばもしかして百合っ娘！？ あたしがネコなわけですか！？

「あら、知らずに居て？ ずっと前から好きだったのに」

「最初からデレデレかよ！ つーか腕離してください痛いです！ 分かりました、仰ることは分かりましたからッ！」

開放された腕を振って痺れを取る。

「つまり、公然セクハラされてたわけですか、あたしは」

「試合も練習も、私は真剣。敬愛する貴女でも分別はつけているつもりよ。

隠しているのは辛かったけれどね。・・・軽蔑したかしら？」

優しい微笑み。

あたしが漫画でしか知らなかったような、切なげな。

「もう少し待っていただけますか」

「・・・・・・・・」

「先輩に勝てるくらい、強くなれたら。・・・その時に、考えさせてください」

「わかりました。少し休憩にしましょう？」

笑顔を咲かせた先輩の思いになら、応えられるかもしれない。

うなずきを返しながら、そんなことを思った。

夢があった。

いつか私にしか描けぬ世界を完成させ、できることなら—これはなくてもいいが—脚光を浴びられる私になりたい、と。

夢が腐ると後で厄介だと教えてくれた同級生は、雑誌に小説を載せた。

鼻屑目なんかじゃなく個人的な好意によるそれでもなく、面白いと感じた。

己の趣味全開で突っ走る書き方の癖は相変わらず。

綿密に構成した世界をノリと勢いで爆走するキャラクター達と計算しているとは分からない展開。

程よく布石を置き丹念に回収する隙のなさ。

してやられたと思うより先に、私は溜息をついていた。

部屋の鏡を見る。

夢見がちな娘の顔を残しながらも、日々の暮らしやアルバイトに忙殺される冴えない女の顔が見える。

溜息をついたところで、呼び鈴が鳴った。

「やあ、元気にしているかい」

「ああ、どもども。雑誌掲載おめでとーです」

「いやはや、精進が足りませぬよ我輩」

「キャラに入り込みすぎー。今日はどうしたの？」

スーパーの袋を見せて、

「我輩、そなたと一献呑みに来た次第。いかがかな？」

描かれた戦国武将（美化済みではあるが）さながらの笑みを見せる同輩を招き入れた。

「いや、なに。この喋り方が結構気に入ってたりするのよね・・・女としては色気ないけど」

「それなら良いんだけどさ。忙しいんじゃないの？」

「息抜き大事でござる、腹が減っては何とやら、知略も武力も空腹では如何ともしがたきものなれば」

日本酒のソーダ割など作って見せながら、うむうむと頷いている。

「じゃあ私は、」

「うん？ どうされたか」

「お腹すいてるのかな。食べても食べても満たせない何かがあるのに、お腹がすいて話にならない。

堂々巡りを破る計略、ござらんか」

「禅問答は苦手でござる。一言でよろしかろうな」

人を食う笑顔を浮かべて、言う。

「夢の賞味期限なんぞ決まっとらん！」

「うお！？ そ、そんだけ？」

後は分かるだろうと言って、同輩は勝手に台所に立った。

才色兼備で行動的、何でもできる器用な子だ。何か料理でもして一席設けてくれる腹らしい。

羨むよりも先にできることを考える。

崩れかけた化粧をきっぱり落とし、夢を追う者の顔を鏡で確認する。

ノートPCを開き脳を働かせ一己を信じること。

小説だなどと胸を脹れるもんじゃない、それでも書くこと。

それだけだ。

でも、それならできる。輝いている彼女に続けるかもしれない。

エスニック調のスープの香りと同級生の鼻歌が、背中を押してくれる気がした。

爆発しろ。爆発しろ。浮かれた連中は全部吹き飛んでしまえ。

巨大な校舎の一室には、そんな呪詛と恨みの声が充満している。

科学部の連中は実に創造的で賢明な者達だが・・・反面、情緒や人間関係の機微と言ったものに概ね疎い。

バレンタインデーというこの日にも、彼らは嫉妬と逆恨みをしか持たないのである。

「失礼します」

「おお、天才君。やっとご到着かね」

「ええ、まあ。そんなことより、実験はどうなんですか、先輩」

先輩はメガネをきらりと光らせ、手にしたフラスコを誇らしげにかざしてみせた。

「天才君、君の提案は実にすばらしかった！ 我々の創造心を刺激し！」

鬱屈した創造欲だとなぜ言えない。

「我々の心情を理解し！」

分かりやすいからな、あんたらは。

「我々に報復と革命の機会を与えるものだった！」

そんなに大げさにしなくたっていいだろう。本物の爆弾だがね、確かに。

「ついに完成だ！」

「おめでとうございます、先輩」

作り笑いを浮かべる。

言っておくが、ぼくは決して彼らを軽蔑しているわけでも、見下しているわけでもない。

創造者は・・・何かを作る者とは、常に建設的でなくてはならない。

嫉妬や逆恨みやストレスやうらやみといったものを抱くのは人間だからいいとしても、それに支配されてはならないんだ。

・・・要は、少しでも先輩方にスッキリしていただきたいのさ、ぼくはね。

「チョコレートがなんぼのもんじゃあ！」

「モテなくて悪いかああ！」

「リア充爆発しろ！」

悪乗りが悪乗りを重ねた先輩たちは、拳を突き上げてシュプレヒコールを上げる。

「先輩、あとはこの瓶にそれを詰めて屋上から自由落下させるだけです」

「うむ。しかし天才君、その携帯は何かね」

「お気になさらず」

ぼくは、あるアドレスにメールを打ちながら屋上へ向かった。

そして・・・先輩は怪鳥音を上げて、屋上からピンを投げる。

大きな放物線を描き、

「ナイスキャッチ！」

出し抜けに空中を走ってきた少女の手に、すっぽりと収まった。

「はい？」

「グッジョブです、お嬢様！」

「ふっふーん、見たかね執事君！ 『怪盗淑女』ただいま参上っ！」

ピアノ線の上でVサインを見せる金髪の少女・・・ぼくの主である、およそこの世に盗めぬ物はないと言われた"怪盗紳士"の二代目へ、ぼくは自分の最高の笑みを返した。

「革命が・・・我らの爆弾が」

「そんな事なくていいじゃん。見せてもらってたけど、必死になって物を作ってた貴方たち・・・格好よかったわよ？」

「しかし！」

「黙りなさい！ 私が言うことは三割くらい正解なのッ！

だいたいうちの執事が、尊敬する人達にリアル犯罪なんかさせるもんですか！」

お嬢様、その言い方はどうかと。

「リア充が羨ましいなら自分の出来る努力をなさいよ・・・。

本物の爆弾作れたのよ、怖いものなんかないでしょ!？」

押し黙った先輩方に小さな封筒を投げ渡し、言いたいことを言った怪盗淑女はピアノ線の上を走って去っていった。

「行ってしまった。天才君、あれは一体？」

「単なるお節介焼きのお嬢様ですよ。封筒を開けてみてください」

先輩の頬を緩ませたメモには、こう記されていた。

『あなたのストレスいただきます、怪盗淑女』

さてさて、時は幕末動乱の時代！ 明治へ向かう時流の中で、逆らうように強く立つ侍たちのおは・・・ぐえ！

「何が幕末だこの野郎！ 今は平成、太平の世だ！ 第一私は侍じゃない！」
殴ったね！ 父上にも生涯で十二回しか殴られなかったのに！ わらわだって野郎じゃないのに！

「殴られてんじゃねえか！ もと姫様ならちゃんとしろ！」
はあーい。

「まったく。普段は絵に描いたようにお淑やかなこの私に、変な言葉遣いをさせて」
地金が出てるんじゃないかな、それって。

「何か聞こえたわね、隙間風かしら」
わーわー、ごめんなさいごめんなさい！ あ、誰か来ましたですよお嬢様。

「執事君だって言ってるでしょ。いい加減に慣れなさい、向こうは何事もなかったようにしてるんだから」

んな、幽霊に言われたって・・・。

『お嬢様、お支度はお済みですか？』

「うん！ 30秒後に冷水を持ってきて頂戴」

『かしこまりました。今度の依頼は少々厄介そうです、ご武運を』

わらわにとって未だ慣れぬ同居人の、ドア越しの気配は速やかに離れて行った。

執事、というのは西洋においての小姓のことじゃと習うたが、かの男（をのこ）は単なるそれとは思えん。

わらわの存在を気にも留めず主に尽くす様、理想ではあるのじゃが。

「何言ってるの、時間よ！」

いえす、まいりますたあ。・・・えげれす言葉には未だ苦戦中なり。

「ここが今回の仕事場ね！」

「そうです、お嬢様。

怪異を呼び寄せ家主を不幸にすると言われる絵画を現在所有しやがっている愚鈍な公爵のお屋敷です」

「容赦ないわね、執事君」

「ええ、まあ。気に入らない奴はどうしても気に入りませんので」

「お父様に似てきたわよ貴方」

「それは光栄でございます」

善人なのに悪人に見える執事君は、口の端を吊り上げてにやりと笑うた。

「ではお嬢様、参りましょう」

およそこの世に盗めぬ物のないらしい義賊を父に持つえげれす娘は、執事とよく似た笑い顔にて

屋敷へと向かう。

こっそり帯刀なんてされちゃってるから、わらわも一緒に行くのじゃがのう。

んで、まあ『れでい』らしく宴なんぞに参加して、件の公爵？ 殿にいたく気に入られたお嬢様と執事君は、無事に名画の前までたどり着きなすった。

「これが“不幸の名画”だよ！ どうかね、美しいだろう！？」

「左様でございます。・・・ところで公爵様いかがでしょう、そろそろお休みになつては」

「うぬ！？ な、何を言い出す・・・」

「この世のものとも思えぬ悪夢を見るその前に」

公爵に眠りとうなる霧を吹きかけた執事君の顔は・・・えもいわれぬ微笑であったことじゃ。

「何かが来るわ！」

怖気立つような気配の後に、描かれた女の姿が現し世に現れおった。

「『雫姫』。お嬢様の短刀を愛用していらした方です。・・・驚かれたでしょう？ “しづく”様」

たまげたと言うものではない。生前のわらわの姿そのままなのじゃから！

絵から抜け出た女は、刀を振り回し髪を乱して、二人を襲うて来おる。

「抜けば魂散る氷の刃・・・ええい寄るな寄るな！」

『寄らば・・・斬るぞえ！』

“怪盗紳士”の二代目が抜いた短刀が、わらわに実体を与えた。

久々の生身の腕と刀で、振り下ろされた刀を受ける。

『やれやれ、おのれの幻を斬るとは思わなんだが。わらわはこんな不細工じゃないもん！ 失せよ！』

和服を仕立て直したおしゃれ服を翻し、一刀にて切り捨てた。

「格好よくないわよ、しづく・・・」

『幽霊だっておしゃれしたいの！ だってわらわは十六で病にかかって助からなんだのよ・・・よよよ』

「あんたは態度が悪いから同情はしてやんない。けど・・・友達になら、なるわ」

『悪霊退散とか言わない？』 「申しませんよ。それより、どうしてしづく様の御身体が戻ったのでしょうか」

“怪盗淑女”がかがみこみ、額縁を拾い上げて微笑む。

女の描かれていた位置には点のひとつとて残っておらなんだ。

「理屈の通じないことも、あるものでございますね。お嬢様」

お嬢様は、小さな紙切れを眠りこける公爵の枕元に置き・・・わらわにもよこした。

えげれす語を習得してから分かったんじゃけど、こう書かれておった。

『貴方の不幸、頂戴しました。怪盗淑女』

「人間とはおもしろいな」

「いきなり何よ」

「創造的で独創的。私たちには考えもつかぬ物を平気で作りおる」

多少古い型のゲーム機を手にした異世界人は、古めかしい喋りを崩さずに言う。

「そうかな」

「そうさ。遊び一つをとっても複雑怪奇・・・最初はおぬしが何をしとるかまるで分からなかったよ」

嘘だ！

と叫びたいほど瞬く間に上達したこいつには、私はゲームでも勝てなくなってしまった。

「過去形だから許してやるけど、ちょっとは手加減しなさいよ」

「そうは行かん」

くつくつと笑うと、犬の耳と尾が可愛らしく揺れる。

「また負けたか！ あんたそのカード好きねえ」

「まあな。この絵札の見かけと“スキル”が気に入った」

ありがちなファンタジー世界を題材にした対戦カード・ゲームが、この異世界人の一番のお気に入りだ。

ゲーム機のボタンを慣れた手つきで押し、閲覧モードに切り替えてイラストを眺める。

カード名、“孤高の獣人”。

カードの力を示す“ランク”は10のうち3と低いが、自分の場がすっからかんの状態で手札から出した場合、このカードより高いランクの相手のカードを場から一掃する“スキル”—まあ、RPGで言う必殺技みたいなものだ—を持つレアカードだ。

対策を講じればいいだけの話なんだけど、私はこいつほど頭が回らないから、つい高いランクのカードに頼り切ってしまう。そこを好き放題に叩かれてしまうわけだ。

「おぬしのやり方も嫌いではないぞ、この爪のみにて戦車に挑むような感覚がする。下手を打てば大負けさ」

「その戦車を平気でぶっ飛ばしといて何を言うやら。あんたさ、大会に出てみれば？」

「ネット大会だから顔晒さずに出れるし」

獣人はあごに手を当てて逡巡し、犬歯を見せてにやりと笑う。

「ふむ、おもしろそうだ。賞品が懸かるなら尚よし」

「全国共通ゲーム商品券三万円分、副賞としてこのゲームで使えるカードを考案する権利だってさ」

「乗った。ネットというのはよく分からん、参加申請をしといてくれんか？」

「OK。出るからには勝ちなさいよね」

獣人は異世界人らしい美貌で、また笑みを浮かべた。

「分からんさ。勝負とは己の技術と力を尽くし、時の運を引き寄せる綱引き・・・どう転ぶか

まではこの目には映らんよ」

「だから楽しいんだがな。・・・でしょ？」

「今から言おうと思ってたんだが」

「ふっ、勝った！」

思わずガッツポーズを作る私に呆れるでもなく、獣人はゲーム機のボタンを押した。閲覧モードを終了させたのだ。

すわもう一勝負と来るかと思いきや、

「全国大会とやらでは、色々な人間が戦うのだろう？」

私のやり方では敵わん相手もいるはずだ。おぬしの力を貸せい」

通信モードを起動し、私のゲーム機にもカード選出の画面を表示させた。

「しょうがないな。戦術が多すぎるとうまく扱えないよ？」

「かと言って偏りすぎても失速する。狡知には多少自信がある、気にせず助言してくれ」

私は孤高にはなりきれんよ。

そう言ってまた笑みを浮かべた異世界人のたたずまいは、先ほどまで見ていたお気に入りのカードとそっくりに見えた。

それにしても、と思う。

「やはり来てよかった」

「いっつも唐突ね、あんたは。今度は何？」

私と異なる世界で生きながら、私の存在を事もなく受容した人間の娘は、車という乗り物を操縦しながら答える。

「いや...こっちに来た時のことを思い出した」

夢現に居る如き心境で、わずか一月前の光景を頭によみがえらせる。読んでいる単行本をめくっても、内容はあまり入ってこない。

自分の世界が気に入らなかったわけではない。

人魚やドラゴンや人間や、私のような獣人が当然に共存し、剣と魔法なんて言葉が似合ってしまう世界。

日常があり、それを破壊しようとする害意だけの生物がいて。

人間に雇われてそういう連中を捻り潰してみたり、龍族のおてんば姫と冒険してみたり。

刺激には事欠かなかった。

そういう永遠にも似た日々を過ごしていたある時、おてんば姫は私に言った。

『別の世界を見てみたいと思わないか』

魔力を持つかのような一言に惹かれて世界と世界を繋ぐ扉に手をかけ・・・。

「着いたよ」

この娘と出会った。

「ああ。すまん」

「いいよ、私も服欲しかったし。ゲームのネット大会で優勝しただけなのに雑誌の取材ってよく分かんないけど」

「カードゲームの専門誌だそう。くだんの大会に協賛でもして、無名の選手が優勝したからさあ大変！

となったんだろうよ」

話しつつ店に入り、布生地を探す。

「どの色がいい？ あんたは何でも似合うから良いよねえ」

「黒が良いな。日の出の如き金色を一点のみ使って欲しい」

「任せなさい。不恰好になってもいいならね」

自称、あんまり頭よくない不器用者。その実は好きなことなら何でも出来るようになりたいと望む夢多き娘。

私の耳と尾を覆う特製の服を、幾つもしつらえてくれている。

会計を済ませて車に乗り込む。

「おぬしは、何故私にここまでする？ 何故、私の話を素直に信じる？」

「また唐突・・・あのね、考えるのは良いけどもっと楽にきなさいな」

今度は助手席に座ってみた私の額を小突いて、娘は笑う。

「私は友達が欲しかった。私の狭い世界をまるごと変えてくれるような、普通ではあり得ない友達。

あんたは正にそう。それだけだよ」

思考の渦が和らぎ、夜明けを見た時の感覚がした。

差し出された泡立つ飲み物を受け取って飲む。

「私はいつも居てやるけど。それでも寂しくなって今みたいなことを考えるんだったら、あなたの友達でも何でも連れてくればいい」

どっかにはファンタジー世界と同化した世界もあるって言うし。

そう言葉を結んで、娘はカバンからゲーム機を取り出した。

「全国大会で優勝しちゃった責任、取らなきゃね。対戦申し込みのメールが山ほど届いてるんだから」

「そうだな・・・負けてやるわけにも行かん。戦力構築をもう一度やろう、副賞も完成してるんだろ？」

私が構想して製作会社の審査に合格した、強すぎず弱すぎずゲームの平衡を崩さぬ三枚のカード。

それらを中心に戦力を選び、我が狡知を存分に振るうことの出来る戦術を組み合わせる。

ランク5の“龍の女王”、手札と場のカードを一枚のみ交換する戦術、“援軍要請”。後一枚は。

「ダウンロード...とやらが済むまで内緒だ」

自覚できるほど口の端をあげて、私は奇縁で結ばれた娘を見る。

残りの一枚。

“力振るう軍師”と名づけたそれは、“孤高の獣人”のスキル発動後にのみ場に出せるカードだ。最後の一撃にふさわしい、ランク7。

頓狂な顔をする親愛なる友を模して考えた、などとは・・・口が裂けても言えはしないのだが。

あとかきのようない訳。

ここまで読んでくださった心優しい読者様、こんにちは。または初めまして。

不肖わたくし、閑古鳥あくたでございます。

関節をみしみし言わせつつ（だめじゃん）、二回目のあとかきをつづっております。

概要にも書いておりますが、これは『プロット集』とも呼ぶべき、小粒な掌編を集めた本です。

頑張って長編の構想を練っておりますが、はていつになりますやら。

今回は前回より百合成分が高めです。っていうか、ほぼ百合です。

物語として、普通の恋愛より好みでありまして、ええ。

耐性がない方には平謝りですが、柔らかく香り立つような百合ストーリーを目指しましたので、ご一読賜りたく存じます。

一話完結ですが、No.7、8とNo.9、10の二組がそれぞれ続き物のお話となっております。

皆様のお時間を拝借するに相応しい物語が、一編でもあることを切に祈って、乱文を結びたいと思います。

お読みいただきまして、ありがとうございました。